

安政南海地震を洒落のめした『絵本大変記』

安政元（1854）年11月5日七時半（午後3時）、安政南海地震が発生した。

『土佐藩政録』には、藩が調査したこの地震の被害状況が記されている。それによると、高知城下に火災が発生したこともあり、焼失・流失した家屋は、役屋214軒、侍屋敷359軒、市郷屋敷17,469軒、流失した船776艘、引網377帳、田地2,531反、米17,589石、変わったところでは鯉節15万本などの被害があり、また、死者は372人に上った。

土佐藩の公式記録以外にも様々な記録が残された。例えば、吉村春峰編纂による土佐関係の一大史料叢書『土佐国群書類従』に収載された細川盈信の「地震日記」は、安政南海地震の32時間前に発生した安政東海地震の津波のことから始まり、翌年の正月26日まで、余震の回数やその規模、人々の避難の様子や被害状況まで克明に綴ったものである。

また、高岡郡宇佐村（現、土佐市宇佐）の眞覚寺住職井上静照が書き綴った『眞覚寺日記』の中の「地震日記」は、宇佐村を中心とした被害などが9巻にわたって記録されている。

静照が記す地震直後の様子は以下の通りである。「七時半時俄二天薄闇く相成近代未曾有の大地震山川鳴り渡り土煙空中に満ち飛鳥も度を失ひ人家ハ縦横無尽ニ潰崩し瓦石ハ四方へ飛び大地破裂してたやすく逃走する事も難く男女只狼狽周章し児童呼叫の声おひたし間もなく沖より山のとき波入来り宇佐福嶋一面の海と成る今夜月の入迄二津浪入る事凡八九度壱番浪より貳番三番の引汐ニ浦中皆流るる」。

眞覚寺から山を一つ東に越えた吾川郡秋山村（現、春野町秋山）に住む郷士島村右馬丞も、その日記「春秋自記帳」に、様々な地震の記録を残している。地震発生時、右馬丞は親戚の岡崎氏の家にいた。すぐに自宅に帰ろうとしたが、地面が揺れて歩くこともままならない。仕方なく岡崎邸内の竹藪に避難する。

「竹藪之内ニ而有之所岡崎之家蔵共土壁悉落大ニ震動スル故魂天外へ飛心地して漸地震止故門外へ出たるに川水兩岸へあふれ堤も一段之川と成

所々破目出来殊外恐敷中を辛勞して帰りぬ」というような有様であった。

その後余震が続く中で、地震の被害を受けて悲しみに暮れる人々の姿、再び生活を組み立てようと奮闘する姿がそれぞれの史料に克明に記録されている。しかし、地震に対する恐怖と理不尽な被害に対する苦々しさとで、その筆致は重い。

さてここに紹介する「絵本大変記」は、重く苦々しい地震の記録とはかなり趣を異にする。

著者は本書の序文で、地震の被害の甚大さを嘆いた後に、地震で打ちひしがれた人々の心を勇気づけるため、百人一首にならった狂歌で笑っていただくと述べている。

たとえば、橋の上の群集が燃え上がる炎を遠望する絵には、詠み人「無難の家持」として「潮江（現在高知市中央を流れる鏡川はかつて潮江川と呼ばれた）にわたせるはしの中程であかきを見れば余ほど焼けり」。

また押し寄せる大浪に家もろとも飲み込まれそうな三人の男女の絵には、詠み人「浦辺の朝臣」として、「浦家屋の軒による浪よるならて夢ならなくに人や流れん」と、いずれも百人一首をもじった歌が添えられている。

「絵本大変記」の成立時期は明らかではないが、このように地震を客観視し、のみならず不謹慎と言ってもいい程に洒落のめしていることから推測しても、地震直後にできたものとは考えにくい。「高岡も町の家蔵さけにけり其俣にしてたてすも有哉」と復興期を思わせるような歌も収められており、地震から若干時間が経過した頃にできたと思われるべきである。

著者についても不詳であるが、インテリ層に属する人物ではなかったかと想像される。冒頭、序文の前に小姓を従えた殿様然とした人物に向かって平伏する侍風の人物が描かれ、詠み人「義道侍腹」として「君か為を（お）しからさりし命とハ地震津波に出合わぬ人」の歌が添えられている。このことから考えても、著者はインテリであると同時に、かなりの皮肉屋ではなかったかとも想像されるのである。

渡邊哲哉／高知県立図書館資料課郷土資料担当

『絵本大変記』

高知県立図書館蔵



